

近畿双松会報

平成17年度会報
(2005)

島根県立松江中学校
島根県立松江高等学校
島根県立松江北高等学校



赤山の歌

一、春日の南赤き丘 その丘の上に育ちたる

我が一千の男子等が 燃ゆる血潮に色どりし
赤心の旗振りかざし 心を定めて立ちにけり

二、若駒いな、き且つ踊り 放つ羽矢の末遠く

生死の境を超脱し 如何なる敵も馳せ抜きて
あわれ栄ある香も高し 桂の枝を手折りけり

あ、紅陵に(赤山応援歌)

一、ああ紅陵に正気あり 青春の子が熱血の

もろ手にかざす紅の 護国旗の色君見ずや
わが当年のますらをが 鉄腕撫して立つところ
宍道湖の空連勝の 覇業のはえに輝きぬ

二、干戈一度おさまりて 平和よしばし春の夢

唯三尺の剣を撫す 丈夫の悲情幾春秋

飛躍をまちて幽谷に 臥竜の思い幾春秋
越年の花吾知らず 唯営々の意気のあと

三、されど高眠永からず 今壮快の晴いくさ

激浪十里燦として 乾坤どよむときの声

ああ戦はん勝ちいくさ 栄えの歴史を飾るべく
渾身の血は躍るなり 戦はんかな友よいざ

目次

ごあいさつ	近畿双松会会長	山本 雅昭	3
	双松会会長	松本 幹彦	4
	松江北高等学校校長	佐藤 健治	6
平成16年度近畿双松会総会			7
平成17年度春期ゴルフコンペ			12
平成17年度行楽会「みたらい溪谷から天川村へ」			13
追悼			23
会員の寄稿			28
寄稿四題	和田 亮介		28
関西経済と観光ビッグバン	渡辺 悟		34
近畿双松会の皆様へ	竹内 一郎		36
近況あれこれ	佐和田 丸		37
クラス会だより(68期、高10期、高11期、北4期、北18期)			39
近畿双松会ホームページについて			46
近畿双松会報告			47
会則			48
会員数一覧			49
役員名簿			50
組織			51
賛助金応募者			52
会計決算書			54
編集後記			55
広告			56

ご あ い さ つ

近畿双松会会長 山本 雅昭

今年ももう、あと残すところ、1カ月になりました。近畿双松会の皆様方にとって今年も楽しく快適な一年間であつたろうと拝察いたしております。

昨年、この会報の「ごあいさつ」は40度近い日本列島の異常な暑さと、華やかすぎるアテネオリンピック等のサプライズを申し述べました。今年も我々は国内外で今まで想像もしなかった沢山のサプライズに遭遇しました。スマトラ沖、パキスタン、新潟の地震、アメリカのハリケーン……等々の自然災害、小泉自民党の様変わりした在りさま、ホリエモンの「会社は一体誰のもの？」騒動、政官業の大きな変わりよう等々、サプライズがありました。

しかし、前年のサプライズであつた「酷暑」も今年はそれ以上の暑さにもかかわらず当たり前になり、自民党と政、官、業の大変化も、来年は当たり前で決してサプライズなことでないように思えるでしょう。こうして毎年サプライズを繰り返しながら世の中がまわって進歩していきます。

しかし、昨今の自然科学の進歩と社会構造の変わりようはスピードが速すぎるように思えてなりません。そして自然現象の異常さと。

先日、あるおばあさんが莫大な遺産を詐欺師に取られました。しかしおばあさんに被害者意識はまったくなく、その詐欺師は「大変よく話し相手になってくれた」と喜んでいるとの事でした。そしてそのおばあさんはなんと几帳面に40数年間、毎日かかさず、日記をつけておりましたが死ぬ直前の約2年間は日付と曜日以外はすべて同じでした。「今日も誰も来なかった。誰とも話さなかった。」

要は何故に世の中が変わっても人の心は変わらない、人は一人で生きてはゆけないという事であろうと思います。

人は年々、均しく年を取り、体は老いて行きます。しかし、我々“故郷”“双松会”を源にした仲間同士が童心に帰って「語り合い」、互いに心の「ゆとり」と「やすらぎ」が得られる源になり得る集いであり続けたいと念じています。

ご あ い さ つ

双松会会長 松本 幹彦

酉年は荒れるといわれますが、風雨が予想を大きく上回る猛威を振るい、世界の各地で大きな被害が出ています。被害に遭われた人々や破壊された自然の佇まいに心が痛みます。これまでの環境破壊の報いとか、自然との共生の大切さを改めて痛感しました。

母校では今年の4月、定年退職された和田秀穂校長の後任に、佐藤健治先生が就任されました。佐藤先生は昭和51年から平成2年までの14年間、北高の国語科の教師として勤務され、その間、文武の両面にわたって高邁な識見と卓越した指導力、ほとぼしる情熱で、生徒諸君一人ひとりの力を引き出すことに努められ、今でも多くの卒業生や保護者から敬慕されている先生です。校長として再登板された佐藤先生のご手腕に、各方面から大きな期待が寄せられています。

双松会の現状や当面の課題につきましては、皆様のお手元にお届けした「双松会会報」との重複を避けるため割愛させていただき、松江を離れている皆さんからよく質問されることの一つ、北高の学区について触れてみたいと思います。

戦前・戦中の中学校や女学校時代には、居住地に関係なくどの学校にも自由に志願することができました。昭和25年、戦後誕生した新制高校の普及を図るために、特定校への志願者の集中を避ける方策として、特に普通科高校のそれぞれに通学区域（学区）が定められました。松江高校の学区は松江市及び八束郡とされ、それ以外の地域からの入学者は、年度によって違いましたが定員の5から10パーセントの範囲内と決められていました。昭和36年、生徒数の急増で過大規模となった松江高校は、松江北・松江南高に2分化され、両校の学区は、松江市に居住する者については大橋川を境にして以北、以南と定められました。昭和58年、再度の生徒数急増に対応して松江東高校が創設された際に学区の見直しが行われ、中学校校区単位に設定されました。現在、松江市には市立の中学校が15校、八束郡には1校（東出雲中）ありますが、北高の学区は、松江一中・松江三中・湖北中・鹿島中の4つの中学校校区に居住する者となっています。また、松江市・八束郡以外の地域からの入学は、定員の8パーセント以内とされています。参考までに、松江一中校区には城北・内中原・法吉・生馬小学校、松江三中校区には雑賀・平成7年に白潟・朝日の両小学校が統合して誕生した中央小学校、湖北中校区には古江・長江・大野・秋鹿・中島小学

校、鹿島中校区には恵曇・佐太・鹿島東小学校があります。

このように北高の学区は限られた狭い範囲であるにもかかわらず、県高校総体では2年連続で男子・女子ともに総合優勝して完全制覇を成し遂げるとか、進学では難関国公立大学に多くが合格することなどから、全国の進学関係者に注目されているなど、後輩たちは文武の両面にわたって素晴らしい活躍をしてくれていてうれしい限りです。

さて、来年は松江北高校創立130周年という記念すべき年を迎えます。式典は来年の11月18日（土）に開催することになりました。詳細は来年度の会報でご案内いたしますが、多くの皆様が里帰りをしていただいて、記念すべき式典を盛り上げてくださいますようお願いして挨拶とさせていただきます。

ご あ い さ つ

松江北高等学校長 佐藤 健治

近畿双松会会員の皆様方には益々ご清祥の事と存じます。また、日頃から松江北高に対し変わらぬ御理解、御支援を賜り大変有り難うございます。

この4月、松江北高校の校長を拝命いたしました佐藤でございます。未熟者ではございますが、双松会の皆様方がこれまで営々として築いてこられた有形無形の優れた伝統に立ちながら、激動する社会に対応できる教育を実践していかねばと意を新たにしている所でございます。

さて、松江北高校は来年130周年という節目の年を迎えようとしています。「質実剛健」「文武両道」を校是とし、「知・情・意」の同化した人間育成を目標とする北高教育から今年も数多くの快挙が達成されました。

島根県高校総体で3年連続19回目の総合優勝を飾ったこと。とりわけ、男子が2年連続、女子が5年連続の優勝と完全制覇の偉業であったことが特筆されます。続く8月の全国総体（千葉）において、陸上競技三段跳で清水悠君（3年）が5位、100mハードルで中山ゆかりさん（2年）が4位と健闘しました。

進路面では、国公立大学合格者が303名、難関大学合格者69名（この数字の伸びが顕著）など素晴らしい成果を残してくれました。このように一見順調に見える北高生ですが、時の波は確実に押し寄せています。少子化による学級減、定員割れ、入学生の学力低下等々様々な課題が生じています。

松江北高校は元来、生徒の自主性・創造性を重んじてきました。また、他を思いやりながら自分を大切にできる人間を育ててきました。私は自らの理想・夢に向かって主体的に「凜として」立つ若者であってほしいと生徒諸君に常に訴えています。不透明といわれるこの21世紀の日本を、いや国際社会を支えるリーダーとして育ててほしいと願うからです。近畿双松会の皆様、どうか今後も松江北高校を愛し、温かく、厳しく見つめ、ご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。

●●●●●●平成16年度 近畿双松会総会●●●●●●

式 次 第

平成16年11月21日

於 阪神百貨店11階 グリーンルーム

◆1部 総 会

- | | |
|-------------|---|
| (1) 開式の辞 | 千葉 潮 幹事 |
| (2) 校歌斉唱 | 赤山健児の歌
さんみゃくうかびて |
| (3) 物故者黙祷 | |
| (4) 会長挨拶 | 山本 雅昭 会長 |
| (5) 来賓紹介 | 双松会 松本 幹彦 会長
松江北高等学校 和田 秀穂 校長
松江北高等学校 富田 一誌 教諭
特別会員(恩師) 八木 幸治 先生 |
| (6) 議長選任 | |
| (7) 事務局報告 | 永江 幹雄 事務局長 |
| (8) 会計報告 | 内田 一三夫 副会長 |
| (9) 監査報告 | 小川 伸江 監事 |
| (10) 議決事項 | 役員選任 |
| (11) 感謝状授与 | 山本 律郎 氏 |
| (12) 閉式の辞 | |
| (13) 母校近況報告 | 和田 校長 富田 教諭 |

◆2部 講 演 会 押田 良樹 常任幹事 司会

演 題 「島根県の産業振興策」

講師：島根県産業創出プロデューサー 矢野 仁 氏

◆3部 懇 親 会

- | | |
|--------------|-------------------|
| (1) 開式の辞 | 松本 耕司 副会長 |
| (2) 来賓挨拶 | 双松会 松本 幹彦 会長 |
| (3) 乾杯の音頭 | 和田 亮介 前近畿双松会会長 |
| (4) 新入会員の紹介 | 石橋 敏幸 常任幹事 |
| (5) 中締め・万歳三唱 | 特別会員(恩師) 八木 幸治 先生 |

以 上

◆◆◆◆平成16年度近畿双松会 総会◆◆◆◆

会長挨拶



事務局長より報告



役員改選・新旧副会長勢揃い



和田校長より母校の近況を聞く



富田教諭より母校登山部の活躍を聞く



総会報告をひとくご出席の皆さん



◆◆◆◆ 講演会「島根県の産業振興策」 ◆◆◆◆

講師 矢野仁氏



故郷・島根県の現状と今後の産業振興策について熱心に聞くと出席者の皆さん。



◆◆◆◆ 懇 親 会 ◆◆◆◆



特別会員 八木先生よりご祝辞をいただいた。



会報を開いて校歌斉唱



松本双松会長(左)と山本近畿双松会長



懇親会司会の松本副会長





平成 16 年度で会報担当より退任の竹内さん
(右・高 1 期)と門脇さんから退任のご挨拶。
お疲れさまでした。



会員と母校の繁栄と健康を祈って万歳三唱



◆◆◆◆◆ 平成17年春季ゴルフコンペ ◆◆◆◆◆

平成17年5月19日 武庫ノ台ゴルフコース

参加：22 名



平成 17 年春季ゴルフコンペ（第 25 回）は 5 月 19 日武庫ノ台ゴルフコースでこれまでの最多となる 22 名の参加により行われました。競技はダブルペリア方式で行われ、寺戸秀明氏（松高 11 期）がグロス 88、ハンディ 15.1、ネット 72.9 の成績で優勝しました。

2 位はゲスト(北高 5 期山口悦子氏夫君) の山口茂氏、3 位は松高 7 期小川一基氏でした。



優勝杯を山本雅昭近畿双松会会長から
受け取る寺戸秀明氏

◆◆◆◆◆ 平成17年度 行楽会 ◆◆◆◆◆

みたらい溪谷から天川村へ

日 時 平成17年10月16日（日）

行き先 天川村

（案内文） 当初、春に実施の予定でしたが紅葉の季節に合わせて上記日程で実施することになりました。

見どころたっぷりの秘境でなかなか行ける所ではありません。お誘い合わせの上ぜひご参加ください。

見どころ

*天川村に向かう前に三輪山大神神社に参拝

祭神オオモノヌシは我が出雲のオオクニヌシ（オオナムチ）の異名といわれています。

なぜ大和に出雲系の神が……。神話と古代のロマンを味わってみましょう。

*みたらい溪谷（紅葉）

*洞川温泉（温泉に入って宴会）

*女人結界門

旅 程：大阪中央郵便局 8：30 発

↓
おおみわ
大神神社 10：30 発

↓
みたらい溪谷 12：10 発

↓
洞川温泉・光緑園西清 15：30 発

↓
女人結界門 16：30 発

↓
大阪駅 17：40 着

バ ス：株式会社大阪観光サービス



車中で研究成果を発表する永江事務局長



おなじく車中で研究成果を発表する松本副会長



おなじく車中で研究成果を発表する松本副会長



バスガイドさん。お世話になりました

大神神社



前列左から：林原、永江、松本、宇藤、青戸、物種、安達ご夫君、飯塚、藤田、山下、水田、山本
中腰左から：村尾、押田、井狩、千葉
後列左から：石橋、畑田、田中、加藤、川島、佐々木、三谷、高東、伊藤、坂本、橋本ご令室、橋本、松本ご令室、
八木、菊田、野々内、物種ご令嬢、安達、大島、神田、小村、土田、松谷、新見

大三輪の杜展望台からのぞむ大和三山



みたらい溪谷



道の駅・ 吉野黒滝 にて



洞川温泉「光緑園西清」にて食事



大峯山・龍泉寺



ここから女人禁制。「結界門」にて記念撮影



天川村紀行

押田 良樹（高11期）

「^{てんかわむら}天川村」不思議な名前をもつ地である。役の行者に始まる山岳修験道の聖地大峰山の麓にあるといい、^{どろかわ}洞川というこれもいわくありげな名の温泉があるという。

その名は耳にすることはあってもよほど山好きでもない限り訪れた人は少ないのではなかろうか。書店に溢れる旅行ガイドを開いても吉野や十津川のように紹介されていることは稀である。

その名に惹かれ、俗界とは隔絶した別世界のようなイメージを膨らませ、この行楽会に参加された会員も多いのではないかと思う。

毎年の行楽会で行く先々の歴史・人物の名解説をされていた山本律郎先輩（松中57期）は惜しくも昨年他界された。その故山本先輩が4年前の十津川村行楽の際、「奈良にはもう一つの秘境がある」と言われていたが、それが天川村である。

昨年7月大峯奥駈道を含む紀伊山地の霊場と参詣道が世界遺産に登録され世間の関心も高まったこと、南阪和道の開通でアクセスもよくなったことから、今回は天川村が秘境シリーズ第2弾として満を持しての登場となった。

なお、当初春の実施を計画したが昨年の台風の影響で現地の道路事情に不安が残ることから秋に延期し、春の参加を予定されていた会員の方々にはご迷惑をお掛けしたことをお詫びしたい。

山本会長、永江事務局長（北高1期）、松本

（北高4期）、千葉（北高7期）両副会長の四氏は事務局児玉氏の運転で8月8日現地へ下見に出かけ準備に万全を期した。

また永江・松本・千葉の三氏は、故山本律郎先輩の衣鉢を継ぐべく、それぞれ解説テーマを分担して歴史書などを熱心に勉強しこの日に備えた。

10月16日（日）、前日の雨がうそのような晴天、絶好の行楽日和となった。8時30分、バスは40人の参加者を乗せ梅田の大阪中央郵便局前を出発した。

今回の旅行はメインの天川村へ向かう途中大神神社に参拝する。昨年の3月に阪和自動車道美原JCTと大和高田バイパス（一般国道165号線）を繋ぐ16.9kmの新しい南阪和自動車道が開通したため天川村への所要時間が大幅に短縮され、寄り道をする時間的余裕が生まれた。

バスは阪神高速から近畿道へ入り松原から阪和道へ、そして美原から南阪和道へ入った。

二上山の南、竹内トンネルを抜けると大和平野が目前に開ける。永江講師が勉強の成果を発表する。耶馬台国大和説で候補地に挙げられる三輪山の麓の纏向遺跡や卑弥呼の墓ではないかといわれる箸墓古墳の話、三輪山の神様と出雲の関係、平安時代の「^{くちずさみ}口遊」に「雲太和二京三」とあるように当時出雲大社は今の倍の高さがあり、奈良の大仏殿や京都の大極殿よりも高い日本一の建物だったことなど、解説に耳を傾けるうち

バスはやがて橿原市内へ入る。右手に畝傍山を見てほどなく桜井市に入り9時半頃大神神社に到着した。

神代の昔、大己貴神（我が出雲の^{おおむちのかみ}）^{おおくにぬしのかみ}（我が出雲の大神主神に同じ）が、自らの幸魂・奇魂を三輪山に鎮め、大物主神の^{おおもののかみ}名をもって祀ったのが当神社のはじまりといわれている。

本殿は設けず拝殿の奥にある三ツ鳥居を通し、三輪山を拝するという、原初の神祀りの様が伝えられている。神社の説明によれば日本最古の神社ということである。

ここで、出雲の神様がなぜ大和に祀られているのか不思議に思われるところだが、梅原猛氏の『神々の流竄』^{るざん}では出雲族は大和の先住民であったと言っているし、司馬遼太郎氏も若い頃の作品（『八咫鳥』）で吉備やヤマトは出雲を本拠にする出雲族の植民地だとしている。また『街道をゆく（1）』の「竹内街道」でも出雲族が三輪山を政教上の中心としていたとの記述がある。

哲学者や小説家の説だけでなく、古代出

雲に関する権威であり著名な古代史学者門脇禎二氏なども、先の纏向遺跡は平安後期以降の出雲庄とダブっていること、三輪山の東南に今でも出雲という地名があること（地図を見ると長谷寺の西に確かにある）、纏向遺跡や当麻町の太田遺跡から出雲系の土器が集中して出ていることなどから、相当古い時期から出雲と大和が深い関係を持っていたと推察している。

先に引用した梅原猛氏だが、『神々の流竄』で記紀の国譲り神話の実際の舞台は出雲ではなく大和だったと述べている。なぜかといえば考古学的に見ても出雲にはそれほど勢力があった痕跡がないというのである。日の沈む西の国、根の国に相応しい出雲を舞台に選んだまでのことで、そのため出雲大社も記紀の作られた頃に合わせて建てられたのだという。

しかし昭和59年の荒神谷遺跡の358本の銅剣の発見、平成8年の加茂岩倉遺跡の39個という過去に例のない大量の銅鐸の発見

や、近年の発見では3重の環濠を持った謎の田和山遺跡、他に例を見ない「四隅突出型古墳」の存在などを見れば出雲は弥生時代からまぎれもなく独特の文化を持った大きな勢力があり、当時の「列強」の一つであったことは間違いのないところである。



大神神社境内にて

梅原氏は出雲を軽く見ていると言いたい
が、『神々の流竄』を書いたのは上記の大発
見のずっと以前なので、その後考えを変え
られたかどうか興味のあるところである。
いずれにしても、「大和と出雲」の関係につ
いては興味が尽きないものがある。

二の鳥居前で記念撮影、鬱蒼とした木立
の参道を拝殿まで登り参拝後、近くの摂社
の狭井神社に参り拝殿の左にある「薬井戸」
から湧き出るご神水をいただく。なんと
なく元気が出たような気がした。

末社の久延彦神社にもお参りする。ここ
は知恵の神様だそう。その近くに大美和
の杜というところがあり展望台があるが、
そこから大和平野がよく見えた。右手に大
神神社の鳥居、遠くに霞む二上山、葛城山、
金剛山を背景に右から耳成山、畝傍山、天の
香具山の大和三山がよく見えた。

大神神社に別れを告げバスは国道169号
線に出て、天川村を目指し南下する。やが
て古代史のふるさと明日香村を通り、薬の
まち高取町を過ぎる。このあたりでは松本
講師より飛鳥時代の歴史の解説を受ける。
遣隋使は何年だったかとか日本史のテスト
問題も出た。

吉野川を渡り下市で309号線に入ってさ
らに南下して行く。

天川村も近づき、今度は千葉講師から役
の行者や修験道の話さらには、青森の戸来^{へらい}
という地名はヘブライ語でキリストやユダ
ヤと関係があるという大胆な話まで出てき
た。

だんだん道幅も狭くなり周囲の風景にも
秘境に近づく雰囲気が出てきた頃「道の駅
吉野黒滝」に到着。時計は11時半、大神神社

を出てから1時間とちょっとである。

ここで暫く休憩をとる。この名物黒滝
こんにゃくは一串100円、弾力があり少し唐
辛子が利いていてとても美味しかった。

バスはさらに南下、新笠木トンネル、新川
合トンネル(阪奈トンネル5,578mに次ぐ奈
良県下2番目に長い2,751m)をぬけて遂に
天川村に入った。国道309号線から離れて曲
がりくねった山道に入る。虻トンネルを抜
けた所に駐車場と観音峰登山休憩所の建物
がある。ここからみたらい溪谷の散策がで
きる。山上川にかかる吊り橋があり、その上
に並んで休憩所の建物側から撮影をした
が、皆の重量で橋が落ちないか少し心配だ
った。

吊り橋を渡ると山上川に沿って遊歩道が
できている。右手に行くときみたらい滝まで
1.7km、左手に行くとき洞川温泉のバス停まで
3kmある。元気な人はかなり遠くまで歩き、
溪谷美を楽しんだ。今年の暖かさもあり紅葉
はやっと色づき始めたところだが鬱蒼とし
た樹林と清流に心身がリフレッシュされる
気分だ。

時計はすでに1時近くになった。バスは狭
い道を洞川温泉へ向かう。時々対向車が来
るがバスは器用にバックして道を譲る。や



洞川温泉



結界門近く

がて温泉街に入り昼食会場の光緑園西清に到着。

特別会員の八木先生のご発声による乾杯で大広間での昼食を開始。秘境らしく川の幸、山の幸いっぱい料理を歓談しつつ味あう。食事を終え宿の浴場で温泉に浸かる人、すぐ散策に出かける人など思い思いにくつろぐ。

旅館街から山上川を渡るとすぐのところに龍泉寺がある。この寺は役の行者の開山によるといわれ、特に5月3日の大峯山戸開式から9月22日の戸閉式までが、参拝者が多いという。境内に水を湛えた浅い池があったが、行者がここで水行をするとのことだった。八大龍王堂もあり、普通の寺とは違う、やはり修験道の寺という雰囲気溢れている。

三々五々温泉街を散策して駐車場へ集合する。鎖をつけた犬がうろうろしていたが飼い主がいるのだろうか。少し気になった。名水を求めて遠くまで行った人もあるようだが首尾は今ひとつだったようだ。周囲の山々は1000mをはるかに超すのであろうが、洞川自体が標高800mを越える高地にあるので余り高くは感じない。バスは最後のポイント、女人結界門へ向かう。結

界門の前で記念撮影。すでに夕方近いうえ周囲は鬱蒼とした杉林、写真は照度不足で暗くなってしまったが、かえって雰囲気が出ているかもしれない。女性が間違っ門の中に入らないように後ろに男性陣が立ってガード、女性は前に並んで撮影した。

すべての行程を終え、バスは帰途に着いた。3講師にマイクを奪われ失業中だったガイドさん、やっと出番を得て話し出した。昨年舞鶴へ行ったときの博学のガイドさんは今回もお願いしたが体調不良とこのことで残念ながら都合がつかなかった。しかしこのガイドさん、なかなか面白く特に仕事に差しさわりがあるといけないので披露しないが、職業柄得たプロ野球界ウラ話は傑作だった。

秘境から都会へと当初予定より遅くなったが、バスは順調に走り7時頃梅田に到着、快い疲労感を感じつつそれぞれ家路についた。

3講師諸兄には多忙な中、いろいろ事前勉強をしていただき、その成果発表で旅の興味が高まったこと、感謝しております。故山本律郎先輩が後継者誕生で安心されるよう、今後ともいっそう研鑽に努められるよう願っております。私といえば、初めて従軍記者を拝命しましたが、車中久し振りの先輩や同期との話に夢中になり、またビールに眠気を催し、折角の講師諸兄の解説も聞き漏らしがち、各ポイントでの行動力にも欠け、カメラも大事なときに電池切れを起こすなど十分その責を果たせず反省しております。次回も仰せつかることがあれば、もっとしっかりレポートしたいと思っておりますのでよろしくお願いします。

まほろばの行楽会

神田 田鶴子（高2期）



大神神社拝殿

待ちに待った10月16日、晴れ、気温24度絶好の行楽日和でした。

大阪中央郵便局前、8時30分、参加者40名、バスで出発しました。4年前の十津川村行きの折、名ガイドなさいました、山本律郎様から「奈良でもう一つ良い所がある」と聞かされていました。奈良の奥座敷天川村です。今回はその三輪山の大神神社、天川村みたらい溪谷、洞川温泉、大峰山入口結界門を巡りました。

三輪山説話に依れば、崇神朝に「大物主神」を祭った意^{おう}富^た多^た泥^ね古^この祖^{いく}活^た玉^ま依^{より}毘^ひ売^めのもとに美しい若者が夜ごと通い、姫は懐妊する。若者の正体をつきとめんと、麻糸を通した針を衣のすそに刺し、糸のあとをたどると、三輪山の神社にいたり、若者はそこの蛇神であったと。室内には麻糸の三^み勾^わが残ったことから、そこが三輪という地名になったとの伝説です。大神神社は拝殿だけで、本殿はなく、三輪山そのものが

御神体となっており、467メートルの山に登る事も出来ますが、私達は時間の都合で、近くに湧き出る御神水を一口頂き、神域をめぐり、心身共にすがすがしい気持ちになりました。参道途中の石の前にはメ縄が張られ、蛇神に見立てたその縄に、生卵をお供えする棚等がありました。

毎年頂くこのあたりの特産三輪そめん、原産地がとかくいわれる今日この頃、改めてこの土地柄に親しみを感しました。

次は1300年前に役行者により大峰開山がなされて以来、山岳修験道の根本道場として栄えて来た天川村に入りました。総合案内所近くで下車、近くの店で名産吉野杉の割箸、吉野くず、おでん風手作りコンニャクを買う。コンニャクを車中で味わっている内に、みたらい溪谷に着きました。溪谷入口の吊橋上で全員写真を撮影し、各自自由散策。私は山道に進む、前の方を見失わない様に歩け歩けと久方ぶりの山歩きでした。落葉や木の根を踏むのもまた久しぶり、崖に咲く小さなリンドウを見つけた時は秋を感じ、あけびの皮を見つけてはつるをあおぎ、実でもないかと。足で感じる土のやわらかさ、まだ紅葉には早い木々の緑も楽しむことが出来ました。

洞川温泉「光緑園西清」には30分遅れて到着、昼食は八木先生の音頭で乾杯、行者宿らしく、コンニャクのおさしみ、鮎の塩焼、キノコと山菜の炊き込み御飯、茶碗む

し、吸物等を談笑しながらおいしく頂きました。

温泉にもものんびり入り、身体の中まで温まり、ほっと一息入れました。

私事で、約20年前この宿に一泊した折りのことです。女性は大峰山に登山出来ないから大峰山を望む稲村ヶ岳(1726m)に登りました。宿を出る時、女将さんが、温いくず湯を作ってくれ、行者弁当(大きなおにぎりとお根の漬物を竹の皮で包んであった)を持たせてくれました。「このあたりは晴れでも、山の上の方では雨が降ることもあるよ」と教えてくれたのを覚えています。足場の悪い崖で雨が降り出し一步一步滑らないように歩き、頂上に着いた時には雨があがっていましたが、大峰山はもやがかかり見えませんでした。

この度は光緑園近くのお豆腐屋さんで、ガンモドキを買いペットボトルに名水を入れてもらいお土産にしました。

15時30分出発大峰山結界門近くで下車、女人結界門前で全員集合写真を撮るのを終え、帰途に着きました。

洞川は近畿の最高峰八経ヶ岳をはじめ山上ヶ岳、稲村ヶ岳等に囲まれ、日本名水百選にも選ばれたごろごろ水、泉の森、神の泉と水のおいしい所で、大きな開発行為もなく、古来よりの水質が今でも万病に効く霊力を持つとされ、遠方より水を求めて訪れる方も多いと聞きました。めったに行けない所に、皆様とご同行させて頂き良い思い出が出来ました。

平成17年度行楽会のお世話を頂きました副会長の永江、松本、千葉様方には下見、準備、解説等のご尽力に厚くお礼申し上げます。写真のお世話も大変だと存じます、いつもいい記念ありがとうございます。

文末になりましたが、山本律郎様ご逝去とのこと、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

どうぞ皆々様健康にご留意の上元気で、またお会い出来るのを楽しみにしております。



追 悼

長年にわたり当会にご協力賜り誠にありがとうございました。心よりご冥福をお祈り申し上げます。

物故会員

(期)	(氏名)	(ご逝去年月)
特別会員	内藤美城雄 様	平成 16 年 12 月
43 期	渡部 善信 様	平成 16 年 10 月
44 期	西村 豊 様	平成 16 年 2 月
49 期	増岡 勝 様	平成 17 年 8 月
51 期	曾我部 忠 様	平成 16 年 8 月
57 期	山本 律郎 様	平成 17 年 1 月
63 期	石橋 郁夫 様	平成 16 年 4 月
65 期	奥井 温士 様	平成 15 年 11 月
68 期	佐佐木 綱 様	平成 16 年 12 月
68 期	稲葉 知三 様	平成 17 年 2 月
高 1 期	原田 米藏 様	平成 17 年 6 月
高 5 期	上杉 好正 様	平成 17 年 9 月
高 7 期	種平 滋 様	平成 16 年 11 月

遺 族 便 り

前略 御免下さいませ。

長期入院して居りましたが、いつかは少しでも体調が良くなるのではと、やりたい事が色々あっただろうと思って居りました。それもかなわずあの世へ行っていました。

近畿双松会には本当にお世話になりありがとうございました。御座居ました。

御香典をいただき誠にありがとうございました。御座居ます。

皆様様によろしくお伝え下さいませ。

原田 芳子

前略 (西村豊 旧制 44 期)

この度はご丁寧なる御香料をお送り頂き、有難うございました。

早速双松会報と共に仏前にお供えさせて頂きました。

晩年は常に故郷を思い松江中学の話を聞かせてくれました。

長い間お世話になりました。

心より厚く御礼を申し上げます。御会の益々のご発展を心よりお祈りします。とり急ぎお礼まで。 草々

西村 昂

いつもお世話になっております。

昨年 4 月 13 日、父石橋郁夫 (中 63) は病により他界いたしました。生前のご厚情に感謝いたしますとともに、今後ともよろしく願ひいたします。

平成 17 年 4 月 5 日

石橋 洋一 (長男)

桜の花も散り始め青葉の美しい頃となりました。

先日は近畿双松会報を、その上香料まで添えてお送り頂きありがとうございました。

皆様方の御厚情有難く頂戴し仏前に報告させて頂きました。

松江時代をいつも懐かしく思い出していたようでした。ほんとに長い間お世話になりました。ありがとうございました。

皆様方の御健康と御会の益々のご発展を心よりお祈り致します。

曾我部 治 (代)

山本 律郎氏を悼む

(59期)

山本 洋

山本律郎先輩の訃を知ったのは1月10日過ぎであった。ご逝去の後、かなり日が経っており、葬送の儀に参列できなかったのは残念であった。昨年の双松会年次総会の際、御病状は回復に向かわれている模様と承り、いずれ拝眉の機会もあるかと思っていたのに、ついぞかなわぬ事となってしまった。

私が山本先輩を知ったのは昭和4～5年、今から70数年の昔である。当時日本赤十字社島根支部が夏休みの約3週間、大社町に小学生を対象とする夏季臨海学校を開設していた。正規の名称は記憶にないが私たちは「大社の保養所」と呼び、松江市、宍道町のほか能義・八束・大原・仁多などの海に遠い山間部の小学生たちが男女併せて200人程度集まっていた。私は小学校2年からほぼ4年間、毎夏そこに入所していたが、勉強は一切なし、長期間の海水浴で真っ黒に日焼けしてお盆まえに生家に帰るという生活であった。山本先輩を知ったのはその時期である。

それから数年経って、松江中学に入学した時に氏は3年生として在学されており、久方ぶりの邂逅となった。しかし何分にも全校生徒千人という大世帯であり、同級生ならともかく、学年が違うからにはたまたま姿を見かければ挨拶する程度で終わってしまった。

昭和62年に私は近畿双松会に入会したが、それが山本先輩との第3回目の出会いとなった。それ以来、18年にわたってご交誼を頂いたことになる。双松会の総会・行楽会といった行事にはいつもご一緒に楽しいひと時を過ごした。

酒がまわると必ず「おい、ヨウさん」——氏は私に“山本君”といった呼びかけはされず、いつもプライベートネームで話しかけられた——その後に続くのは「大社の保養所は楽しかったな。稲佐の浜で君に平泳ぎを手ほどきしたのは僕だからな。覚えているかい？」

「はい。よく覚えていますよ。スポーツが得意でない私が泳ぎだけは人に負けないようになったのはあなたのお陰です。それにしてもあなたは女の子に親切でしたね。犬かきしか出来ない1、2年生の女の子の手を取って泳ぎを教えていなさった」

酒盃を傾けつつ、この他愛もない話を幾度も繰り返したものである。

ところで山本先輩は南大阪の歴史愛好者の集いである『河内どんこう』なる同人誌の中心的存在として、永年にわたり活動を続けられた。氏の日本歴史に関する造詣の深さは驚くべきもので、後醍醐天皇・楠木正成・正行父子・新田義貞・足利尊氏といった南北朝の武士たちに関する解説はプロの歴史学者に劣らないものといえる。氏は平成2年～平成10年の間に『建武中興の演出者』『戦国うら史談』という著作を上梓されているが、その内容は私たちが教わった歴史教育とはかなり異なった観点に立って述べられている。氏の豊富な知識に基づく独自の歴史観には感嘆の他はない。ご恵

与を受けた歴史書をひもときながら、心からの敬意を表する次第である。

古来、人生には四厄ありとされている。「生・老・病・死」がそれである。山本先輩の場合、最後まで周囲に老を気遣わせることなく、僅か半年の病と、四厄のうちの二つを一気に駆けぬけて昇天されたことはまことに幸運なご生涯であったと想うわけである。

幽明境を異にした今、ここに追悼の粗辞を捧げ、謹んでご冥福をお祈り申しあげる。

合 掌



故 原田 米藏兄 (高1期) を偲んで

(高1期)

竹内 一郎

平成17年6月6日、逝去されました。

先ず、深い哀悼の意をささげ、心からのご冥福をお祈り申し上げます。

それと共に、約3年半にわたる入院生活の介護を尽くされた御夫人と御子息様には、長年のご心労が癒され、ご健康が守られます事を祈りつつ、心からお悔やみ申し

上げます。

約3年半前、研究会出席のため、駅への途上で転倒され、頸部損傷で緊急入院だったとの事ですが、入院初期には、私もお見舞して対面で笑顔のこともばも交わしました。その後、あい次ぐ転院で、次第に面会困難となり、奥様から年に数回、電話で様子を伺っており、意識は鮮明なれど、首から下は動かずとの事を聞き及んで心配しておりました。ベッド上での長年の忍耐は、察するに余りあるものであった事と思います。

原田兄の略歴は、同期の諸兄にはご承知の事かとは思いますが、東京外語大卒後、昭和29年から62年迄を、島根県内の公・私立の中・高校教諭、県教育庁の指導主事として、島根県教育界への貢献は少なからぬものがあつた事と存じます。

私が原田兄を良く識る様になったきっかけは、2度目の派遣による米国留学から帰国後(昭和63年)大阪府下に定住される事になり、その後ご本人より連絡を頂き、数十年ぶりの再会からでした。大阪市内のホテルに私が招き、5時間に及ぶ語らいの時をもち、痛飲しました。その時、彼の恐るべき酒豪ぶりをも知る事となりました。

帰国後、大阪では関西外大大学院に籍を置き、ドクターコースに学びつつ、大阪産業大学、帝塚山大学、大阪商業大学、四条畷女子大、府立高工専等に、非常勤講師を兼務で勤められました。後半期は、体調をくずされながらも、よく耐えて頑張られました。

大学院での英語学専攻では「日本の英語教育改善論」、言語文化専攻では「小泉八

雲と民俗学」及び「小泉八雲と日本の宗教」でした。また、別に八雲会会員として、京都府大の公開講座「八雲に親しむ」を受講中でした。

原田兄が、もう一つ非常に関心を示された事は近畿双松会の事でした。全国でも珍しいと思われる熱意溢れる同窓会の運営、しかも同窓会の本部ではないにもかかわらず、活性化と結束と自主性と継続力がすばらしいと思っておられた様です。特に、毎年連続で、このような会報を制作しているところは他にはないからと、いたく感動され、是非とも会報の力になりたいから、何でも手伝うから言ってほしいとの心強いエールを貰いました。

すぐに入会され、2年後位に私から事務局長さんに推薦、承認されて幹事として励まれました。さっそく編集上での座談会記事のための先・後輩を集めての司会役をお願いしました。名司会ぶりで、うまく話を引き出して貰い、特筆すべき座談会記事となりました。その他「特集テーマ」選定にも相談に乗って貰い、また、寄稿文依頼の呼び掛け人として編集委員長を3年間お願いいたしました。でき上がった会報はそのつど、二人で喜びを共有しました。

また、体調をくずされる迄は、総会、行楽会、同期の近畿一双会にも励んで出席されました。

話して思った事ですが、心やさしく、善意の人であり、普遍性のあるものの考え方は、さすがグローバルなセンスの持ち主だと感心しました。

休む間もなく目標をもって走り抜かれた、原田兄の大阪での晩年を今、思い浮か

べつつ、感無量なものがあります。

人生のベストを尽くされたのですから、ゆっくりおやすみ下さい。

同期の諸兄と共に貴兄の魂の平安を心からお祈りして、お別れの言葉とさせていただきます。

平成17年7月

合 掌



種平 滋君の死を悼む

(松高7期) 幹事
廣 政 俣 彦

種平 滋君は、松高7期の卒業生で私個人としては高校時代とくに親しくつき合いはなかったが有名人物だったので少なくとも7期の者達で種平君を知らない者はいないと思います。そして近畿双松会の七期の代表として常任幹事を長年担当され、双松会自体に対しても大変助力をされてると、山本君から“同期の種平君が手伝ってくれてるので大変ありがたい”といつも聞きおよんでおりました。とくに平成16年度近畿双松会会報p.20～22に満州大連市から引き揚げ時の苦労話を寄稿された方です。私も会報を受け取り彼の経験談を興味深く読ませて貰った一人でした。

それから2週間ばかり後に山本君より彼の急逝の報を受け、大変驚愕致した次第です。種平 滋君は前述のごとく高校時代から人間味豊かな、仲間の面倒見の良い、誰からも愛され信頼される好人物でした。彼の呼びかけで、7期の近畿在住者だけの同窓会を開催し相互の親睦を深めることができたのも彼以外には出来ない事でした。このような同窓会を継続的に開催するためには、誰かボランティア精神で企画推進の労を厭わない人物が必要不可欠だと思いますが、その役割を種平君は、自ら率先して果たしてくれていましたので我々同窓生にとっては大変有難くまた、得がたい存在でした。あらためて彼の存在意義を感じさせられております。

昨年12月上旬に彼の突然の訃報を受け、大ショックでしたが、何とか彼の蒔いた種を絶やしてはならないと、微力ですが私が立ち上がり、本年3月大阪弥生会館にて約30名が集まり、彼に黙祷を捧げると共にありし日の彼の思い出話に花をさかせ、2次会でもその話がもち切りでした。

また2月下旬、関係書類を受け取るべく、竜が台のご自宅を訪問し奥様ともお話をさせていただきました。奥様も当座は、ショックが大きく、放心状態であったようですが、幸いにもご長男が近くに住んでおられ、葬儀等も全て円滑に済まされたとのことでした。彼は、お孫さんを大変可愛がっていたようで、その後お孫さんが来ると、『おじいちゃん、どこへ行ったの?』と聞きますので『お星様になって天に昇ってしまったのよ』と言っているのです』と話しておられました。東京にも次男の方がおられ

る様で、元氣でご活躍との事でしたので、奥様も徐々に回復されることでしょう。

来年は、松高7期生全国同窓会が5月17日松江市ホテル一畑にて開催されるとの連絡が参り、先般近畿在住者全員に予告連絡を致しました。

我々は、亡き種平君の遺志を継ぎ、今後も近畿地区の松高七期同窓会を可能な限り継続して行きたいと思っております。

種平 滋君のご冥福を祈りつつ、ペンを置きます。

合 掌



寄稿四題

(高1期)
和田 亮介

穴

「何ということをするのだ。そこへ坐れ！」

濡れ縁に手をついた私の目の前を、猛烈なスピードで尺八が跳び、庭石にあたって二つに割れた……。

怒髪といっても、天を衝く髪をもたぬ父は、綺麗に禿げた頭から、まだ十分な怒気を発してはいたが、それでも竹を投げつけたことで、少しは気も納まったのだろう、私を見据える目に、多少の落ちつきを取り戻していた。

父の書斎から、中庭をへだてた私の部屋に、お父さんが呼んでいるから、すぐ尺八を持っていらっしゃい……と言いに来たのは、たしか母だったと思う。正確には覚えていないが高校の二年か、あるいは三年の頃か。

書斎の襖をあけるなり、父は言った。

「今、お前の吹いていた尺八は、どの竹か?」
“寒山”です、とその尺八の銘を答える私に、すぐここで吹いてみると命じた。

「音調べ」という、洋楽で言えばドレミにあたる基本音を出すや否や、彼は無言で私の手からその竹を取り上げた。

じっとその竹を見つめていた父は、やがて低く抑えた声で言った。

「この手穴（指孔とも言う。尺八には前に四ツ、うしろに一ツ穴がある）は一体どうしたのだ……」

「……。大きくしました」

「なぜ？」

「大きな音が出ると思ったので……」

次に飛んで来たのが、冒頭の父の怒声だった。

やや細身の“寒山”は、父の作った尺八だった。この世界では「地無し」と言って、竹の中の節を落とすだけで正しい音律を出す、百本に一本もないほどの竹材だったが、その頃の父の吹き料にするにはやや細く、音質も柔らかすぎたから、しばらくはお前が吹いたらいい、歳をとったら自分が吹くと言っていた、その「手穴」をいじったのである。彼が湯気を立てて怒るのも無理はなかった。

ただ、こっちだって初めから壊すつもりは毛頭ない。それどころかもっといい尺八にするつもりだった。というのもこの竹、音が小さいこと以外に不足はない。そこで「よし一つ……」と切り出しナイフを持ち出したのが、つまりは悪魔に魅入られる発端になったのである。

最初、一番上の穴から削っていく。少しずつ少しずつ。次は二番目、そして三番目。ふと気がつくと、一つ目より三つ目が少し大きくなった。こいつはまずいと再び一つ目を少し捻げる、今度は二つ目よりも大きくなった、二つ目も大きくしなくては……。

数時間を要し、すべての穴を削り終わって、あらためて全体を眺めてみると、細身のわりには、五ツの穴が異常に大きくなっていることに気がついた。

一瞬、不吉を予感しないでもなかったが、それでも、その大きくなった穴から、旧に倍した音が出るであろう期待の方が、はるかに大きかった。そして胸躍らせながら唄口（息を入れる上端）に唇を触れ、最初の息を入れたのである。

音が出た……。確かに音は出た。

しかし、それは、“寒山”の、あのまろやかで美しい音色ではなかった。破れた障子を吹き抜ける木枯らしにも似た、まさに索莫たる音だったのである。その上、百本に一本もないというあの自然の正確な音律は無残にこわれ、背骨を失った五体のように、その五つの穴は各自勝手な韻律を奏でたのであった。

母が、私を呼びに来たのは、その時だったのである。

音というのは、竹すべてで奏てるもの、硬い竹は硬く、柔らかい音は柔らかい竹から生まれる。

「音の大小は、手穴の大小ではない。管孔と手穴とのバランスなのだ。それにしても手穴を拡げて音量を上げようなど、お前の幼稚さには呆れてものも言えないが、そんなことより、お前の心根の方がより問題だ」

おのれの未熟を棚にあげ、すべてを尺八のせいにする。そんな心がけの奴がいくら吹いたって、今度は尺八の方でそっぽを向くにちがいない……。喋っているうちに、父の語調も次第に柔らかくなっていったが、私の自責の想いは逆に深まっていくのであった。

自らに責を求め、おのれの技をこそ磨かねばならぬ身が他にこれを求める。今の企業の在り方の中にも、これと同じ過ちがないと言えるだろうか。（『ほづゑ』より）

熱かった船場フォーラム

“柔らかな連携まちづくり”

せんばげんきの会が提唱したこのフォーラム(三月二十六日)は、終始異色であった。

これまで数多く、フォーラムやシンポジウムと称するものを聴いてきたが、四時間半に及ぶ長丁場を、これほどまでに息をつめた例はかつてない。

このフォーラムに参加した船場まちづくりの団体は十一グループ、それぞれの代表の熱く語る一言ひとことに、綿業会館の会場を埋めた聴衆がかたずをのむ。その数二百人余り。

船場賑わいの会の代表、藤井秀昭さんから案内を頂いて会場を訪れたのだが、事前の想像とは違ったフォーラムの熱気に、心底驚ろきかつ悔いた。というのもその十日ほど前、ある新聞記者の“船場の未来”についての質問に、つい悲観的なコメントを漏らしたばかりだったからである。

東西一キロ、南北二キロのこの狭い土地に、ここまでの思いを抱き、手法は異なっても、船場活性にエネルギーを注ぐ人たちがいたとは……。明るい未来を記者に語らなかった己の不明を深く恥じた。

そしてあえて“柔らかな提携”としたことから、一致結束させることの難しさがまた痛感させられたのである。

フォーラム二部では、東京銀座街づくり会議、横浜まちづくり倶楽部、都市界隈まちづくりネット(京都)という、三都市の代表が参加し、船場のグループとの間で公開討議が行われた。これがまたとても面白かった。

都市の歴史、文化、経済それぞれの違いが浮き彫りされ、終始活潑な質問、適切な応答が飛び交い、狂言回しの大阪市大・橋爪助教の出番が、ほとんどなかったほど白熱したのである。

「しかし、船場が仮に活性化しても、われわれ域外のそれにはつながらぬと思うが……」

会場内から出たさめた質問に、瞬時に返された横浜の答弁は、胸のすく鮮やかさだった。

「自分たちの力で立ち上がらないところが、かつて活性化した例はありません」

“愚痴とぼやきは銭にならん”という船場のことわざは、むしろ横浜に生きていると思わずうなった。

議論百出の中で共通した結論は、人と人とのコミュニケーションの大切さと難しさだった。

「銀座では朝、それぞれ店の前を掃除し、水を撒く。そんな人々によって奇麗になった街には、違法駐輪もほとんどない」

「銀座には、どうか歩いて来てくださいと言っている」

「御地通りには、北大路魯山人や富岡鉄斎が彫った木の看板が多く目につく。かつて、そのお店で品物を買った鉄斎や魯山人が、そのお礼に看板を書き、そして彫ったもの。それは永く続いた老舗の多い証（あかし）です」

船場にも、フォーラムの会場になった綿業会館(重要文化財)をはじめ太閤路地など、歴史的遺産にはこと欠かない。それらを美しく大切に保存し、現代に生きる景観としていかに取り込むか……。

街に誇りを持ち、その街に惚れぬいた人たちの討議は、聴く人たちの心を和ませ、未来に夢を抱かせるものであった。

会が終わり、綿業会館をあとに三休橋筋を北へ歩く。

「どこの国でも、もう一度訪れたい場所は、常に散歩して楽しい街」と語った阪大鳴海教授の、フォーラム総括の言葉が印象に残った。

(大阪日日新聞「^{みおつくし}澤標」平成17年4月19日より)



日本語今昔

昨年暮れあたりから、日本の子どもの学力の著しい低下が、一流紙の一面を飾るほどの話題になっている。

中でも驚いたのは日本語、新聞に載った一つ一つを言挙げする字数はないが、その面白さは吉本はだし、ただそれが大まじめなのだから、笑ってはすまされない。あらためて、日本語の学力とは何だろうと頭をひねった。

私が昼間の大半を過ごす船場にも、今では、“^{でっち}丁稚”奉公を経た経営者はほとんど姿を消した。私が好きだったそんな人たちには、共通する三つの特徴があった。

一つは実に豊かな表現力、そして味のある手跡、そして卓抜な暗算力の三つである。

これはほかでもない、いうところの『読み、書き、そろばん』という、“丁稚”教育の所産である。

田舎から出て来た、十歳前後の子どもたちが船場の商家の“丁稚”になり、朝早く叩き起こされ、一日中雑用に追いまわされ、やっと晩めしにありついたと思ったら『読み、書き、そろばん』が待っている。

眠い目をこすりながら、いろはガルトは教材に、「犬でさへ歩かなんたら棒にも当たらん。まして商人が……」。

アタマやのうて手で考え、足で知恵つけなはれと教わって、そのカルタやことわざを古新聞に書かされる。

ところでいろはガルトは、すべて教訓である。“丁稚”上りの表現力の豊かさは、ここから養われ、古新聞の手習いが名筆を生むのである。

ついでながら、教材に使われたといういろはガルトには三種ある。出来た順番に言えば京カルタ、つぎが尾張(名古屋)カルタ、一番新しいのが江戸カルタ。

同じ「い」でも京は「一寸先は闇」、尾張は「一を聞いて十を知る」。一番新しい江戸カルタが「犬も歩けば棒に当たる」、俗に言う犬棒カルタである。

ほかにも「一寸の虫にも五分の魂」「石の上にも三年」「急がば^{まわ}廻れ」「色の白いは七難かくす」「犬が西向きゃ尾は東」。

こうしてみると、われわれが日常しゃべっている比喩のほとんどが、カルタからの引用と気付く。

さてカルタで育った手代が、得意先の主人に向かって言う。

「いやア今日の大將(主人)の話、ホンマ白犬のオイド(尻)でしたわ」

「ナンヤテ、人の話を白犬のオイドでどういうことや」

「尾も白かった…」

「ナール……。ホンナラ黒犬のオイドはどうや」

「尾も白くない」

かつての船場は、かかる品はよくないが、生きた日本語が飛び交って、文字通り「商は笑なり」だったのである。

片やメールと称する日本語。いまや小学生までが、携帯電話は珍しくないという。メールで使われる彼らの日本語がいかなるものか、私などにはおよそ想像外。

ただ折から入試発表のシーズンである。張り出された合格表をたしかめて、携帯のメールを打つ学生の姿が見えるようだ。

「サクラ、チル」

(大阪日日新聞「^{みおつくし}澤標」平成17年3月8日より)

文化と匂い

私は松江が好きである。

「当たり前だ、お前は松江で、学生生活の大半を過したからではないか」

たしかにそうだが、一概にそれだけではないものがある。

まず「匂い」から入ろう。

私は今、大阪の郊外に住んでいる。松江にはコンクリートで塗り固めた、大阪の乾いた匂いが無い。何処となく何となく湿っているのだ。出雲空港に降り立った途端、宍道湖の形容しがたい匂いが鼻を打ち、やがて全身が包まれる。それは晴雨にかかわらぬ。

自然の美しさは、大阪であってもことは欠かない。ただ美しさの中に、しっとりしたうるおいは、あきらかに両者、その性格を異にするのである。

旧制松江中学から、新制島根大学まで、宍道から松江まで車で通った。

単線の車窓からみる、湖の向こうにつらなる島根半島は、松江につくまで、様々な表情を四季に応じて見せてくれたが、今でも十六ハゲという、半島のところどころが、自然に削られた、赤土のハゲを数えながら通った印象が、心に焼きついている。

そして、そのハゲの一つ一つにも匂いを感じていた、といったら笑われるだろうか。

谷崎潤一郎に『陰翳礼讃』という名著があるが、私にはその「陰」と「匂い」が無関係ではあり得ない。

住む人は、「山陰」という呼名を嫌って戦後の成長期、「北陽」という珍にして妙な呼称に変えようという案が、大真面目に論議

されたことを、当時の島根新聞で知り、驚いたことがあった。

住む人達にとって、山陰という名称は如何にも雨の多い、陰鬱なやり切れなさを感ずるかもしれないが、雨や霧に浮かぶ大橋や、嫁ヶ島の風情は、反対側の山陽には絶対にないものだ。ここにも匂いのちがいがあ

る。
松江の匂いを、具体的に表現する言葉を知らないが、私がかかわる繊維にたとえば、やはり絹だろうか。わが住む大阪は綿である。

絹は、おかいこさんの吐き出す、一本のつややかな繊維からなる。綿は乾いた棉花から紡ぐ。松江の匂いは、絹の匂いだといってもいいかもしれない。

昨年三月開館した県立美術館。ある経済雑誌から、故郷をテーマにと乞われて、この美術館をとり上げた。菊竹清訓氏の独創的な白亜の建物もさることながら、閉館時間を、宍道湖の彼方に落ちる七彩に変化する落日、つまり日没に合わせるとい

う、松江の人達の自然に対する才覚を紹介したのだが、たった一枚の短い文章だったのに、意外に反響を呼んだらしい。わざわざ松江に出掛けた人が、私のまわりでも十人は下らない。

中には雨で、肝心の落日を見ることが出来なかったと、文句をつけた人もいたが、その人ですら、はじめての松江の印象を「本当にじょうびた(上品な)落ちついた街だ」と賞めてくれた。

経済誌の一文では「日没後三十分。広い館内の美術を鑑賞したあと、腰を下ろしゆっくりと、湖の彼方に陽の落ちるのを待つ。

金色に輝く光を受けて、七彩に変わり、さまざまな形に万化する雲。美の余韻に浸りながら館をあとにする。

時間とのせめぎ合いに疲れる世の中に、閉館「日没」という四季の変化を採り入れる、これが島根、そして松江の文化なのかもしれない。」と結んだが、文化とは、何も目に見えるものだけが文化ではない、と思ったからである。

「匂い」の次は「時間」である。

加齢と共に一年を短く感じるのは、松江も大阪も変らない。しかし住む場所で「感じる時間」は全く異なる。

慌ただしく起き出して、慌ただしく仕事をし、慌ただしく眠る。アッという間の大阪と、ゆっくり陽が昇り、悠然と陽が落ちる松江との、感じる時間のちがいは大きい。

文化と文明は、しばしば相反する。私は松江に帰った時、余程のことはないかぎり神魂神社を訪ねる。これまで少なくとも十五回はこの神社にぬかずいたであろう。

松江の近郊大庭の里は、神々のおわす神域を思わせる。理屈は抜きだ。ある時はバスに揺られ、ちかごろはタクシーに頼む。

運転手さんには、神魂神社と告げ、あわせて、行きつくまでは無言でいて欲しいと頼む。半分は目をつむり、周辺の景色の匂いと時を楽しむ。

唯一の完本である出雲風土記に、この神魂神社の記述はないときく。しかし松江は、この神魂神社の、たしかな影響下にあると、独り勝手に決め込んでいる。

いつだったか、あの自然石の石段を下り終わった時、一台のタクシーから、一人の青年が降り立った。私を運んでくれ

た運転手が、今の青年は小泉さんですよと告げた。ハーンの曾孫にあたる人物だった。

かつてハーンが、はじめて神魂神社を訪ねた時、どのような気持ちを抱いたのだろうか。

日本人以上に日本を理解した、そのハーンの思いを想像するだけでも幸せだった。

神魂神社の参道が、ちかごろ舗装され、一見美しくなった。駐車場もととのえられた。しかし私には、昔の土のままの参道がありがたかった。

少し大袈裟だが、これが文明というものである。利便性の追求、しかし文明は、文化をこわさないまでも、稀薄にすることはまぎれもない事実だ。

十数年前の神魂神社と、今のそれは、少しもちがわない。しかし、神魂神社を取巻く周辺のたたずまいの匂いと時は、確実に失われていったのである。

さて松江の文化を語るには、亀田山にそびえる千鳥城や、松江七代藩主不昧公を語らずしては、それこそ点睛を欠くだろうが、やはり神魂神社をはじめとする、神々の里としての、出雲の匂いと時と無関係に、幕藩時代の松江の文化はあり得なかったであろう。

土地のもつ匂いと時空、そこに文化が生まれ、やがてその時空によって文化の匂いが消されていく。

これが文化と文明の、避けられぬ宿命というものであろうか。



関西経済と 観光ビッグバン

(北8期)
渡辺 悟

そごうの再開店で心齋橋筋周辺は異様なほどのにぎわいを見せている。そのにぎわいで相対的に目立たなくなったが、台湾、中国からの観光客の買い物パワーはすごい。

たとえば大丸心齋橋店。平日の午前中の買い物客の半分は台湾、中国の人たちで、日本製の高級化粧品や、自国で手に入りにくいスーパーブランドを買い漁っているという。

日本橋の電気街に台湾の人たちが押し寄せるようになったのはそれほど新しくないが、中国の海外旅行解禁（99年）で勢いは増す一方だ。とりわけ、04年9月から天津市と山東など4省が「解禁対象地域」に変わり、それ以前の北京市、上海市、広東省と合わせると計3億7000万人が海外旅行マーケットに登場した。むろん、全員が海外旅行するわけではなく、目的地がすべて日本であるわけでもないが、なにせ数が多い。急激な経済成長で懐は潤い、旅行熱も尋常ではない。東アジアの観光ビッグバンはすでに始まった。

大阪はこれを本気で受け止める気があるのか、ないのか。

「関西経済は観光集客を中心にした第三次産業に活路を見出すべきだ」。関西経済

連合会の新宮康男会長（住友金属工業会長、いずれも当時）がこう明言したのは97年。重厚長大産業のトップが率直に「脱工業化」の勧めを語ったとして注目されたが、その後の流れを見ていると、行政や民間が本気で観光・集客に活路を開こうとしているとはとても思えない。

大阪で旅行代理業を営む経営者は、韓国人旅行客が関西空港から帰国するときに多額の円をまたウオンに両替していると嘆いた。せっかく来ても、どこに行ったらいいのか、どこで買い物できるのかといった情報が極めて乏しいからだという。

この苦言を聞いたのは5、6年前。その後事態は改善されたのか。いずれにしても、たとえばドイツ・ロマンチック街道のように、どんな小さな町に行っても沿線の基礎的な情報、行事などの日替わり情報がきちり手に入るといったシステムはこの地域にはないことはたしかだ。

「観光とは自国の優れた文化の発信そのもの」。ドイツ観光局の関係者は胸を張ったが、関西に、あるいは日本そのものにそうした自覚や矜持は感じられない。逆に、「観光とは物見遊山」であり、モノづくりに比べて一段低い産業という空気がなお漂う。

かくして日本の観光従業者は全産業の6%と米国の半分。21世紀最大の成長産業である観光への備えはまことお粗末なままだ。定住人口が減っても交流人口を増やせばいい。この明確な戦略によってフランスやスペインは人口の2倍の観光客を迎えているのに、日本を訪れるのは人口の20分の1、年間600万人でしかない（出国は

1700万人)。

そうこうするうちに香港にディズニーランドが出来、ソウル市では中心部を通る幹線の高架道路4キロを取っ払い、50年前暗渠にした清溪川を復元するという大工事をわずか2年でやってのけた。

歴史遺産を回復し、環境汚染を減らし、観光を活性化する——「21世紀文化環境都市ソウル」の行動は実に果敢だった。御堂筋の側道を歩道化することだけでも小田原評定が続く大阪市とはあまりに対照的である。

もっとも、関西経済の活路は観光・集客だけではない。シャープ、松下電器産業がデジタル家電分野で相次いで大型投資を関西で行ったように、国際競争力のあるものについては中国に出かけて生産する必要はない。「やがてこれらも追いつかれる。日本は別の技術でさらに先に行く。未来永劫これを続けるしかない」とは松下役員の言葉である。その意気やよし。「技術立国日本」もまた、追求すべき姿であることは言うまでもない。

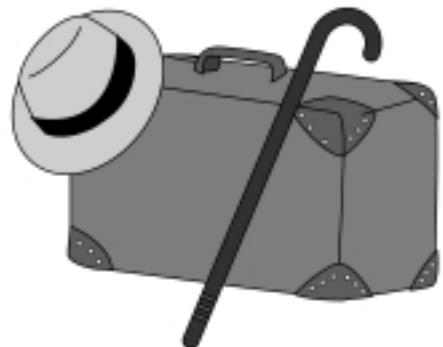
ただ、企業の新規開業率は全国比で低く、廃業率は高い事態が相変わらず続いている。「多死少生」の関西経済にとって、やはり第三次産業育成は喫緊の課題なのである。

大阪市内では00年から中心部の人口増加が始まった。いわゆる都心回帰である。森トラストの森章社長は、この流れは今後さらに強まるとした上で、人口増が新しいサービス産業を生み出し、それがさらに都心回帰をもたらすという好循環につなげるためには「職住近接都市」をどう作り上げ

るかが大阪の課題だと指摘した。来阪した竹中平蔵大臣も、1920年代に始まった郊外型ライフスタイルが80年余りを経て都心型ライフスタイルに変化し始めているとの見方を述べている。

脱重厚長大、脱素材産業と、関西経済の構造改革が叫ばれて久しい。結局、関西経済、とりわけ大阪経済の蘇生、構造改革は、人口の社会増とアジアからの観光客を受け入れる魅力あふれる都市建設そのものだということになる。市政改革を進めるに当たっては、その視点を是非忘れないでほしい。

(筆者は毎日新聞論説委員)



近畿双松会員の皆さまへ

(高1期)

竹内 一郎

日頃は本会に、またこの「会報」の為に多大な御協力を賜り、深く感謝申し上げます。

さて本年は、本会発足から47年となりますが、併せて「会報」発行も連続47回となります。同根の、松江中学校、松江高校、松江北高校を通して、130年になろうとする、伝統校の歴史は偉大です。

本会も、その歴史の中で、近畿に在って、やがて半世紀を迎えようとしています。

初代の永岡会長さん以来、そして歴代会長さんの時代毎に、世代を超えて出会いを求め、交わりが深められた意義は大きかったと思います。

本会は今、名実ともに北高の時代です。各担当の副会長さんも、北高卒の方々がそれぞれの分野で、すばらしい成果を挙げておられます。その中で、「会報」が果たす役割を考えてみたいと思います。

過去に於いて、総会出席率は全会員数の15～20%で、行楽会が10%というのが現状です。この数字は決して悪くはないと思います。

その点ですが、全会員に100%つながっているのが「会報」だと思います。接着剤の役割を果たしているという事でしょうか。

そこで思いますのに、「会報」の活性化は

本会の活性化に直結する事ではないでしょうか。ここで、特に北高卒の皆様方をお願い申し上げます。どうか本会の増員と共に「会報」の寄稿者の若返りのために、もう少し関わっていただけないでしょうか。同窓会誌の使命として、基本的には名簿の更新や、クラス会の動静報告は不可欠のものです。一方、年1回発行なので、速報性は期待できません。そこで楽しめる会報の企画という事ですが、他者のものを読む楽しみと共に、自らが書く楽しみをも味わっていただきたいのですが、いかがでしょうか。後々の良い記念にもなると思います。

読み物としては、過去、現在、未来を問わず、自由に、あらゆる分野で、広く深くも良し、何でもアリ!! 大歓迎です。近畿在住、皆様のリアルタイムの生の声、時事問題での意見発表、ビジネス、随想、映画、音楽、演劇や読書感想、自作の詩、短歌、俳句、川柳、全スポーツ、旅行等々、その他、奇談、珍談、娯楽何でもぶっつけて下さい。異なったものが多いほど、個性的で元気が出ます。新聞投稿欄の様な記事、これを本会報では「会員の寄稿文」のコーナーに載せます。

また、年毎に「特集テーマ」を設定して、このコーナーでもお待ちしております。なお、昨年2004年のテーマは、「海外生活」でした。いつの時代でも結構です。文章の上手、下手は関係ありません。自己満足大歓迎です。まず、気楽に参加してみてください。書く事によってストレスを解消し、励みにもなり、新境地も開けます。「会報」を一緒に作りましょう。

あなたのために、この「会報」の場を用

いて下さい。積極的なご投稿を本会事務局宛、毎年7月末までお待ち申し上げます。

なお、今年度より、会報担当を、千葉潮副会長にお引き受け頂くことになりましたので、何とぞ今迄以上の御支援ご協力を賜ります様、よろしくお願い申し上げます。

出典：「近畿双松会報」前 編集・制作担当者より

近況あれこれ

(高10期)

佐和田 丸

郷里の頓原町が、平成の大合併で、平成17年1月隣の赤来町と合併して、飯南町となった。町名は飯石郡の南の町の意味で、「小さな田舎からの生命地域宣言」を基本理念に、新町のキャッチフレーズは、「いのち彩る里、飯南町」で、人口は6千余である。

出身はどこと聞かれ、「とんぼら」と答え、と、「豚の特産地ですか」と問い返され、返答に窮してきたが、これからは不愉快な思いをしなくてすむ。いっそのこと、開き直って、豚の一大生産地にして、それを売り物にしてはどうか、と思ったりしたこともあった。頓原の頓は、子どものころ、富山の置き薬に、頓服薬があり、なじみの深い文字であった。今は死語に近い。時折、道頓堀あたりをぶらつくとき、なんとなく親しみを感じ、郷里を思い出して癒される思いである。

閑話休題。閉町式が、年末の12月に開催され、関西頓原会会長の小生にも、出席の案内がきたので、墓参をかねて出席した。ふるさとの山河は、何度見ても懐かしく、理屈ぬきにいい。啄木の歌、「ふるさとの山に向かいていことなし、ふるさとの山はありがたきかな」がふと思い出される。

予想していなかったが、席上、表彰された。感謝状には、出身者会を通じ、ふるさととの交流により地域振興に多大な貢献とある。すこし、面映い思いである。



お世話になった地元町へなにかご恩返しできないか、過疎に悩む地元になにかできることはないか、との思いから、有志とともに会員の親睦と郷土の発展に貢献できる事業にとりくんできたのだが、目的達成には未だしの感があり、内心忸怩たるものがある。

毎月送られてくる広報「いーなん」の前月比人口何人減の記事には、こころが痛む。

飯南町には、県の中山間地域研究センターがあり、文字どおり中山間過疎地域の活性化・振興化の研究をしている機関がある。ML参加者をみていると、全国に会員が居住しており、島根県が誇ってよい施設、機関とっていいのではなかろうか。一度、この研修に参加したことがあるが、いい施設が出来たなどの印象を持った。このような施設を充分に活用して、地元飯南町はもとより、同様な地域が発展していくことを願うや切なるものがある。

あと、残された課題は、関西頓原会と近畿赤来会との統合問題である。結婚と一緒で相手があることなので、どうなるかわからないが、地元町人口1万以下なら、ふるさと会はひとつでよいというのが個人的な考えである。各会は、これまでどおり単独で行く会、地元の合併にあわせて合併を模索する会、会の諸般の事情にあわせていろいろのようである。

地元の意向も踏まえ、両会協力して、関西(近畿)飯南会はいいなあ、といわれるような会ができることをこころから願っている。

新聞を読んでいたら、今の60～65歳は、プラチナ族・プラチナ世代とのことである。ダイヤモンドのように、どこにあって光り輝くのではなく、少しひかえめであって、

自分の存在をちゃんとアピールしているプラチナ。そういう意味からきているらしい。

他人事と思っていたが、歳を勘定してみると、わたしもそのうちに入ることに、ふと気がついた。そんな気はいっこうしないのだが、知らず知らず歩いてきた道を振り返れば、小生らの年代は赤紙が舞い込んでくることもなかった。余談になるが、終戦60年にあたり、天皇陛下が、先般、サイパン島をご訪問された。現下のように、不況、リストラも倒産もすくなかったように思う。戦後の一時を除けば、比較的、物にも恵まれたよい時代であった。今もこうして、一応元気でくらしていけるのは、プラチナ族の一員といわれるのも、案外、正鵠をえているのかもしれない。

定年退職して、サンデー毎日になった。したいことをして、嫌なことは遠ざける、いたってきままな生活を送っている。長男(京都大学理学部・京都大学大学院卒)長女(大阪大学)は、家出して(結婚して)独立し、今は、荆妻、次女(薬剤師、米国カリフォルニア大学、サンフランシスコ)との3人暮らし。目下のところ、日々これ好日といったところで、プラチナ時代を楽しませてもらっている。

人生80年時代とか。いや、90年、100年時代だという人もある。100歳以上の人もどんどん増えているとのことだ。そういえば、実母も今年98歳になる。定年後の長い人生をいかに生きるか、誰もが真剣に考えなくてはならない時代が来たように思う。

いろいろと人生を楽しんで、健康長寿で、ピンピンコロリ P P K で、死ぬまで長生きしたいというのが、今のわたしの希である。

◆◆◆◆ クラス会便り ◆◆◆◆

双松 68 期同窓会

(68期) 小豆澤 切



原（敏） 伊原 佐藤 本田 三宅 原（正）

柴田 渡部 藤田 永井 入江 永海

安部 江田 青山 石橋 久保田 加藤 山本 千葉

角田 野津 常住 並河（健） 伊藤 土井 鏑木 金田 山本（和）

湯浅 大野 加藤 内藤 福島 田中 並河 岩橋

とき 平成 17 年 6 月 8 日

ところ 松江宍道湖岸、皆美別館
「近畿より並河 和夫君参加」

会次第

○司会 安部 英治幹事

今期物故者 8 名への黙祷

○挨拶 内藤明会長

福島 邦光君旭日双光章受賞披露

加藤 哲夫君旭日双光章受賞披露

○宴会

恒例の会場での 1 年振りの会合にお互いの健康を喜び合う中で、本日欠席者で返信のあった 80 名の内 3 割以上の 25 名が何らかの病や苦痛のための不参加、“70 代は気をつけよ”との先人の言葉通り要心が肝要也。酒が入り夕闇に宍道湖が漸くけむる頃には会場は“赤山健児”の大合唱に沸き立っていった。

松江高校第10期生 卒後45周年記念同窓会



日時 平成16年9月20日（月）

場所 松江しんじ湖温泉 ホテル一畑

○高校10期生・卒後45周年記念同窓会が開かれ、参加した。参加前、温泉駅近くに足湯温泉ができており、時間もあったのでしばし楽しんだ。

同窓会には、全国から、120名近くが集まった。懇親会では、懐かしい顔と久闊を癒した。リタイヤーした者、今なお現役で活躍しているもの、定年後をたのしんでおるもの、その他さまざまである。

車椅子の参加者もあり、心が痛む。約600名あまりの同窓生だったと思うが、

そのうち、約50名がすでに鬼籍に入っていたのには、いっそう悲しいことである。物故者欄に親友だった名前があるのにはなおさらである。ここから冥福を祈るや切。

反面、あちこち不如意とはいえ、こうして身障者にもならず、まがりなりにも元気で生きておられるのには、ありがたく、感謝のほかはない。

二次会は、会場を松江駅近くの「メイビー」に移し、いつ果てるともなく懇親を深めた。
(文：佐和田 丸)

松江夜曲

作詞 西條 八十

作曲 古関 裕而

一、松江大橋 ^{からかねぎぼし} 唐金擬宝珠
 なぜに忘れぬ 忘れぬ
 さくら春雨 ^{あいあい} 相合がさで
 君と眺めた 嫁ヶ島
 まつまつ松江は 君を待つ

二、二夜逢わねば 眠れぬ枕
 ひびくろの音 波の音
 恋の湖 ^{みづうみ} 雨戸を開けりゃ
 月にほんのり ^{ちどりじょう} 千鳥城
 まつまつ松江は 君を待つ

三、松江自慢は 小泉八雲
 のこる縄手の ^{なわて} 鳥屋敷 ^{とりやしき}
 今も咲きます 国際愛の
 色香 ^{いろか} なつかし ^{かきつばた} 杜若
 まつまつ松江は 君を待つ

四、水はうつくし 人情はやさし
 松江 ^え 絵の町 ^{うみ} 湖の町
 大社詣りの ^{まい} つい日がのびて
 七日ながめた 松江富士
 まつまつ松江は 君を待つ



この歌は、松江市が昭和23年の秋、向島町を会場として「貿易と観光大博覧会」を開催したときのテーマ音楽であり、当時市民に広く愛唱されたものである。

作者は、西條 八十作詞・古関 裕而作曲という、当時のゴールデンコンビによるものである。

「詞」は、七七七五の四句を重ねた、いわゆる「都々逸詞」であり、前句を男女相愛の情と思わせながら、後句でさりとかわすあたり実に心憎い手法である。また各節の終句「まつまつ松江は」の「まつ」を、松と待つにかけて、観光松江のPRをしっかりと果している。

「曲」は、へ短調、2分の2拍子、♩=62、音域もB^b～D^bと歌い易く作られている。曲の特徴は、各節の頭の部分に♩の休符をおいて調子よいリズムで歌い出せる。特に第3節め(9小節)からは、日本旋法(陰旋)の下降慣用句と、音列を一気に駆け上がることによって、城下町松江の情緒を一層もりあげている。

☆テープご希望の方は、下記へご照会ください。

松江市産業振興部観光文化課

〒690-8540 松江市末次町86

TEL 0852-55-5293 FAX 0852-55-5564

島根作曲家グループ紫陽花会員

土谷 幸男

卒業45周年記念同窓会(松高11期)



1-4Rのみなさん



5-7Rのみなさん

松高11期生は昭和35年の卒業から45年の節目を迎え、還暦同窓会から4年ぶりに同窓会が開かれました。今回は初めてのイベントとして同窓会の前日にゴルフコンペを開催しました。

11月4日(金)玉造温泉C.Cに21名が集合、ダブルペリア方式で優勝を競った結果、遠路北海道から参加の酒井宏祐君がグロス96、ハンディ21.6、ネット74.4で見事優勝、2位には飯石武史君、3位に寺戸秀明君(近畿双松会会員)が入賞しました。

これ以上ない秋晴れの下、紅葉を始めた木々や宍道湖の景色を楽しみながら旧友と

のラウンドで気持ちのよい一日でした。パーティ席上、次回は関西でやろうと話が盛り上がりこれから同期生のゴルフを通じた交流が深まりそうです。

翌11月5日(土)は同窓会本番、この日も素晴らしい晴天、午後5時集合までの時間を利用し、懐かしい和久羅山、嵩山登山を実行したグループもありました。その中には前日のゴルフ参加組も4名いて、その元氣さに敬服しました。

同窓会会場は前回と同じサンラポー・むらくも、参加者は157名でした。出席名簿(156名)で住所別に見ると地元松江が69名



8-10Rのみなさん



11-13Rのみなさん

と圧倒的に多く関東28名、近畿24名、松江以外の鳥根県下18名、中国11名、北海道・九州各2名、中部・四国各1名となっています。

人数が多く全員での記念撮影はできないので、クラスごとに4グループに分かれて撮影後会場に入りました。司会進行役は元BSSアナウンサー長谷川昭博君、まず物故者への黙祷のあと、実行委員代表小林哲朗君の開会挨拶、田中ふきさんの音頭による乾杯のあと懇親会に入りました。

この4年間の間に会社をリタイアし、職場が変わった者や全くフリーになった者な

ども多く、その後の生活のことなど話が弾みました。席上松江市鑿行列保存会の会長をしている安達弘君から来年10月の御堂筋パレードに鑿行列が参加することがほぼ決まっており、在阪の同期生もぜひ参加してほしいとの話がありました。校歌斉唱に続き作野正明君の発声により万歳三唱、最後は5年後の卒業50周年記念同窓会には皆元気で再会しようという、秋庭勇一君の閉会の挨拶によりお開きとなりました。

(文・押田 良樹)

北高4期(高校16期)2005年度 近畿地区同窓会



後列左より 山田敬子さん(旧姓:矢壁)、梅木隆志君、山田さんご夫妻、坪倉司郎君
前列左より 三成宏二君、森光雄君、三次孜君、車野巧悦君、松本耕司君

本年度の同期同窓会は7月2日(土)午後4時から肥後橋の北京料理店「徐園」で、集合写真前列左から三成宏二、森光雄、三吉孜、車野巧悦、松本耕司、写真後列左から山田敬子、梅木隆志、山田光彦(ご夫妻)、坪倉司郎の9名が集合し、人数的には少ないながらもぎやかに久闊を叙することができました。

本年は、生保会社勤務で長らく大阪を空けていた坪倉氏と三吉氏が最終の地?大阪での勤務となり顔を出してくれたこと、ゴルフ会常連の森氏(薬局経営)が遂に宴会にも初参加してくれたこと、山田さんがご夫妻で参加してくれたことなど話題には事欠かず、楽しいひとときを過ごしました。

特に坪倉、松本は本庄小学校以来の竹馬の友、車野、三吉は安来一中時代からの同

窓、梅木は実家の美保関に帰らずバスを途中下車して本庄の坪倉邸(鮮魚店)にて受験勉強した仲など、濃密な青春の思い出話に花が咲き、二次会のご承知の山田ご夫妻経営のラウンジ「ラサ」にてカラオケを競い合っておひらきとなりました。

女性の参加が少なくてこれでいいのかと真面目な議論も少しはしましたが、「マ、飲マカイ」となれば、後は野となれ山となれのいつもどおりの同窓会。年2回のゴルフ会と同窓会をコンスタントに続けていますが、その我々もあと1年で還暦!!この年になれば青春のひとときを共有した友達が一番ということをしみじみ感じた次第です。

欠席、音信不通?の皆さんも早く元気なお顔を見せてください。(文・松本 耕司)

北18期（高校30期）・近畿地区同期会



新阪急ホテル「ビーツ」にて。
左から：大村誠一郎、加藤千晴、千葉潮、阿部能子（旧姓：米田）、吉原昭、西村毅（旧姓：吉岡）。

2005年最後の同期会を11月11日夜、大阪は梅田界隈で開きました。同期会という大げさなものではなく、数年前に近畿双松会で再会した4人が意気投合し、1年に数度会って酌み交わしていたのが始まり。今年からは、他の同期生にも声をかけ、毎回6～7人でわいわいがやがやとやっています。

特別に何をするわけでもなく、ただ数時間しゃべりまくり、日ごろのストレス解消が目的。今回は、「蕎麦はやっぱり出雲蕎麦」「帰省したらどこで食べるか？」と情報交換したり、腰痛の予防法など、年齢相応のことをアドバイスしあったり……。

ところで私たち北18期生は、19期生とともに川津校舎と赤山校舎の二つの学舎で高校生活を送った希有な年代。私たちが3年に進級する前の春休みに校舎移転が行わ

れました。生徒も椅子運びなどの作業を、うんとしましたっけ。

川津と赤山、どちらが印象的だったかという問いには、今回の出席者のうち、川津＝4.5人、赤山＝1.5人（どっちも好き、という人が1人いたので。）「川沿いにある古い川津校舎の開放的な雰囲気、校風をつくった……」「双松の伝統ある赤山の地に立つ、当時最新の設備の校舎が誇らしかった」などがその理由でした。

まったくもって気楽な会ですので、他の同期生の皆さんにもぜひ参加していただきたく、この誌面でもご案内いたします。来年第1回は1月頃に集まる予定。ご関心ある方は近畿双松会ホームページにあるメールアドレスにメールをご送信ください。よろしく願いいたします。

（文・千葉 潮）

編集後記

このたびも、無事に「近畿双松会報」を皆様にお届けすることができました。玉稿をお寄せいただきました皆様に心から感謝申し上げます。今回は、山本律郎先輩、原田米藏先輩、種平滋先輩という、当会に大変ご尽力いただきました方々の追悼文がはからずも集まり、先輩方の人生の軌跡を偲びつつ、非常に残念に思っております。

近畿双松会の愉しみの一つに、年代を超え職域を超える方々と知己になるということがあります。故郷を一にしているからか共感できる部分が多く、お付き合いの中で知らず知らず勉強になることもたくさんあります。(若輩者ですのでまだまだ学ぶことばかりというのが実情です。)

実は、入会するまでは、年齢を横断する同窓会にこのような愉しみが待っているとは思ってもみませんでした。これを愉しみに近畿双松会に入会される方がもっともっと増えればいいのに、と考えるこのごろです。

申し遅れました。私、今年度より会報の編集を仰せつかりました千葉 潮(北18期)と申しま

す。入会してまだ3年余りと日が浅いのですが、47年の歴史があるこの会報を前任の竹内一郎先輩、門脇洲美先輩から引き継いで、さらに親しまれる誌面を目指そうと決意しております。ご指導賜りますよう、よろしくお願い申しあげます。

また、新任にあたり、表紙・誌面デザインもリニューアルいたしました。皆様の忌憚のないご意見を賜りたく存じます。

今春から近畿双松会のホームページ(HP)も本格稼働しております。インターネット必須の時代を迎え、この会報もHPと連動して、さらに能動的かつ立体的な広報を目指していきたく存じます。(HPへのご投稿もよろしくお願い申し上げます。)

また、個人情報保護という観点から、今号より会員名簿は別冊にして、会員の方のみに配布させていただくことになりました。ご不便をおかけいたしますが、なにとぞご理解の上ご了承いただきますよう、お願い申し上げます。

皆様のご健勝をお祈りして、編集後記といたします。(編集担当 千葉 潮)

近畿双松会慶弔規定

本会員の慶弔に際しては、下の如く、本会の名において敬意を表することとする。

(一) 慶祝の場合

- 一、個々の慶祝は不問とする。
- 一、特に必要ある場合は、会長、常任幹事協議の上適当に執行する。

(二) 敬弔の場合

- 一、正会員の場合、一律五千円也の香料を供える。
正会員とは、年間会費を納めあるものをいう。
- 一、その他の場合、会長、常任幹事に諮り、適宜敬弔を行う。

近畿双松会報 平成17年度(2005年)版(通巻47号)

発行日：平成17(2005)年11月27日

編集兼発行者：近畿双松会

発行所：近畿双松会事務局

所在地：〒550-0002 大阪市西区江戸堀1-21-35
(株)トーヨーコーポレーション内

TEL 06-6443-2062 FAX 06-6443-9736

郵便振替口座：00910-0-103665

近畿双松会事務局

制 作：アルゴ

印 刷：(株)NPC コーポレーション